

「沈黙」と「全てなるもの」：ジュール・ラフォルグの病理と創造

佐藤，正和

(出版者 / Publisher)

法政大学小金井論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学小金井論集 / 法政大学小金井論集

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

75

(終了ページ / End Page)

94

(発行年 / Year)

2012-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007745>

「沈黙」と「全てなるもの」

—— ジュール・ラフォルグの病理と創造 ——

佐藤 正和

ジュール・ラフォルグ⁽¹⁾の作品を読んでいく時、しばしば「全てなるもの」という不可解な言葉と出会う。研究家である広田氏によれば、それは「宇宙の秩序を統べる全能者であり、詩人ラフォルグが自己の存在の意味を追求する時、常に念頭にあった反抗の対象」であり、詩の主題の中心にすえられてきたものであった⁽²⁾。ラフォルグにおいて、「全てなるもの」は、このように重要な存在であったにもかかわらず、これまで十分に考察されてきたとはいえない。本稿では、『地球のすすり泣き』など初期作品群を中心に、「全てなるもの」を病理学的な面から考察し、「月とピエロの詩人」という従来のラフォルグとは別な像を浮き彫りにしていきたい。

第一章：「沈黙」

本題である「全てなるもの」に入る前に、それと密接な関係がある「沈黙」について述べることにする。「全てなるもの」に比べれば、使用頻度の少ない言葉であるが、重要な語のひとつである。ラフォルグは『遺稿集』の中で、この「沈黙」について以下のような不思議な文章を書き綴っている。

《「美」とは、「永遠の沈黙」である。ぼくたちの情念、議論、激情、芸術のあらゆる騒々しさ、それらは、沈黙など存在しないと信じさせようと騒音を出している。倦みつかれてぼくたちが鎮まると、沈黙が八方からもどってきて、淀むのが聞こえる。するとぼくたちはいっそう淋しくなる。永遠に騒ぎ続けるほど強くないし、「永遠の沈黙」に耐えるほど強くないのだから。

ぼくたちが憔悴しきるまで「沈黙」が上から押さえてくる——大洋の水が沈没した船の泡だちを閉ざすように（…）あるいは宇宙空間が死せる惑星の上で閉ざすように。》》⁽³⁾

実体があり、まるで生きているかのように、上から人を押さえつけ、憔悴しきるまで人を苦しめる不思議な「沈黙」。「沈黙」など存在しないと思いついたために、さまざまな方法でもって抵抗を繰り返す。ただ、こうした抵抗も長くは続かず、同じ苦しみの状態にもどることになる。しかしながら「沈黙」は人を苦しめながらも、同時に「美」そのものとして魅惑してやまない。ラフォルグがここで語っている不思議な「沈黙」を要約すれば、このようになるだろう。

威嚇的でありながら魅惑的な「沈黙」。それはラフォルグにおいて、二つの意味を持っている。一つは、こうした「沈黙」がラフォルグの病理にかかわっている点。そしてもう一つはそれが初期の作品創造に大きく寄与をしている点である。

まず前者に関してみていくことにする。不可思議な「沈黙」にとりつかれ、押さえつけられるという実体的体験。こうした体験は特異なこととみえるが、けっしてラフォルグにかぎったことではない⁽⁴⁾。これは、精神分裂病（統合失調症）特有の症状であり、その病に罹患した多くの患者は、表現の違いはあれ、何かわからないものの《《圧力・圧迫感》》⁽⁵⁾といった不快な体感を訴えることがある。ラフォルグが「沈黙」と呼んでいたものも、そうした病から来る「圧力」にほかならない。またラフォルグは、大海の水の比喻で「沈黙」について語っていたが、これもよくこの「圧力」に苦しめられる精神分裂患者から発せられる言葉の一つである⁽⁶⁾。加藤敏氏は、その著『幻覚・妄想症状』の中で、こうした未知なるものの圧力を「非一意味の力」と呼び、その体感について次のように述べている。

《《分裂病性幻覚における＜非一意味の力＞は、たとえ潜在的であれ、何よりもまず身体を対象にし、身体を巻き込む特性をもつ。事実、幻聴についての先述の「圧力」「響き」「振動」など患者自身の言葉は、なんら比喻ではなく、字義通りにとるべきである。》》⁽⁷⁾

またこのような「圧力」といった体感と共に、その存在の不可解性が問題となる。つまり患者にとって、その存在は理解不能の謎の存在として迫ってくる。

ラフォルグが、この不可思議な存在を「沈黙 (le silence)」と呼んでいたのは、そのためである。(フランス語の「沈黙」という語には、日本語と同様、静寂といった物音一つしないという意味と、問われてもけっして秘密などを明かさなないという意味がある。) 後述することになるが、初期の作品群には、こうした「沈黙」の類義語である「謎」「深遠」などの語が並び、その答えのなき不可解な謎への困惑あるいは苦悩が歌われている。加藤敏氏は、こうした精神分裂病患者が苦しめられる身体感覚を伴った不可思議な存在を、「未知の存在X」と呼び、その体験を次のように述べている。

《《こうした急性期の核となる基本病態は、当人にとって未知で謎めき、しかも圧倒的な力をそなえた未知の「存在X」に、突如、全面的に所有され、弄ばれる事態に求められる。あるいはまた、それは、文字通りブラックホールといえる圧力強度の高いカオス(裂け目)の中に投げこまれてしまう事態といえる。》》⁽⁸⁾

つづいて作品創造について話すことにする。多くの患者は、そうした圧力そのものに苦しみ、あるいは、わからないがゆえに生じるさまざまな幻覚にさいなまれることとなる。しかしその一方で、この「未知なる力」あるいは「未知なる存在X」は、苦しみを与えるものであると同時に、わからないがゆえに謎めき魅惑してやまない存在となる。先ほどのラフォルグの文章において、「沈黙」と「美」が重なっているのはそのためである。魅惑してやまない存在(美)への限りない探求、そしてそのあくなき表現を通じて、芸術家となる人も多い。そしてその表現手段によって、ある者は画家、ある者は詩人と呼ばれることとなる。

《《われわれの臨床の場で出会う患者のなかには、(…) 自分の体験に根ざす強烈な色調の絵や一風変わった造形作品を作ったり、自分の体験をつづった詩や小説を書いたり、あるいはまた、新作言語をちりばめた難解な哲学思索をめぐる症例がまれではない。彼らは、未知の謎めいた存在Xの立ち現われの出来事に、恐れと不安の中で強く魅惑され、そのため、この出来事を、言葉によって、あるいは絵画ないし造形的な手法によって表現せずにおれないのである。それは、未知の存在Xの立ち現

われを言葉によって、あるいは形象によって表現するという作業である。
天才的な芸術家の作品や、思想家の思索のなかには、こうした創造行為
の所産と考えられるものが少なくない。》》⁽⁹⁾

その「天才的な」という言葉が、ラフォルグにふさわしいかは別として、「沈黙（未知なる存在X）」に魅惑され、創作を行なうラフォルグは、そうした病理的創造行為者の一人であったといえるであろう。とりわけラフォルグの初期の作品には、そうした病理的体験が、はっきりとした形であらわれている。たとえば『遺稿集』の中で、「沈黙」について「ぼくたちが憔悴しきるまで『沈黙』は上から押さえてくる（…）宇宙空間が死せる惑星の上で閉ざすように」と、「宇宙空間」と「死せる惑星」といった比喻で語っていたが、ラフォルグは同じ比喻を使いながら、作品の中でその状況を次のように綴ることとなる。

《《時代はめぐりを終えた！「地球」は死んだ、永遠に、
（すすり泣きが震える！）最期のあえぎの後
こだまもない静寂の、黒き沈黙につつまれて、
「地球」はで巨大な漂流物のように漂っていく。》》⁽¹⁰⁾

そして「沈黙」の比喻の一つである「宇宙空間」あるいは「蒼穹」は、ラフォルグの詩においてはしばしば人を威圧し支配するものとして描かれ、そして同時にその威圧に対する人の徒なる抵抗も描かれることとなる。

《《いやちがう！その話は止めよう。本当にお笑い種！
そしてぼくは、情け容赦ない蒼穹を拳で威嚇した！》》⁽¹¹⁾

また、その不可解なものについても、この時期のラフォルグの作品をみていく時、上でも述べたように「謎」「深淵」なる語が多出する。ラフォルグは、「宇宙空間が死せる惑星の上で閉ざすように」と圧力を宇宙のイメージで語っていたが、この謎は宇宙の彼方に置かれることになり、いわば宇宙の謎ということで探求が行われることになる⁽¹²⁾。たとえば『地球のすすり泣き』の『深淵の閃光』の一節は、その当時の状況を物語っているといえよう。

《突然、眩暈の衝撃。一条の閃光、
直接その光を浴び、ぼくは、
狼狽と恐怖に身をふるわせ、
完全な昏迷状態にある「宇宙」に探りを入れて
その謎を解こうとした！
「全てなるもの」は孤独なのか？ぼくはどこ？》⁽¹³⁾

こうした「謎」の究明行為の一つとして、多くの患者に異常ともいえる読書欲あるいは哲学への耽溺をもたらすことが報告されている⁽¹⁴⁾。当時のラフォルグも、ある種の高揚感を伴いながら、読書欲にかられ、パリのサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館に通いつめ、科学書や哲学書、とりわけハルトマンの『無意識の哲学』を耽読することになる。しかしながら、こうした「謎」はけっして解かれることはない。はじめから謎など存在しないからである。そして「謎」への叫びにみちた問いかけはむなしく消えてゆき、「謎」は依然として存在し、徒労だけが積み重なることになる。次の詩は、自らが陥った袋小路を物語っている。

《おお、空間の深淵の永遠の沈黙よ、
通り過ぎる人類が空にむけて投げる叫びは、
冷酷な平穏の中に、いつも消えるだろう。
でもそこから「運命」のお言葉が降ることはけっしてなかろう。
とはいっても、どこを探せば、どこで頭を休めればいい？
いかなる酒がお前に彼方の苦悩を引き起こした？
ぼくの心はそのことについてぼくに多くを語りたがるが、
ぼくの理性はだまっている。
なにも返答なし！恐ろしい謎は相変わらずそこにある。》⁽¹⁵⁾

《さらにぼくは問いつづける、不安と疑惑に我を忘れて！
なんといってもそれは「謎」なのだ！返答を、返答を待つ！
なにも返答なし！時間が一滴一滴こぼれる音に耳を澄ます。》⁽¹⁶⁾

第二章：天才的芸術家の系譜

「未知の存在Xの立ち現われを言葉によって、あるいは形象によって表現する。天才的な芸術家の作品や、思想家の思索のなかには、こうした創造行為の所産と考えられるものが少なくない。」⁽⁸⁾ このような創造行為者の系譜には、詩人であればA・アルトーそしてヘルダーリンの名前が並ぶことになる。そしてこの流れで見て行けば、その中にラフォルグの名前を加えることに、問題はないように思われる。しかしながら、その系譜にラフォルグの名前を加えることは、難しいといわざるをえない。事実ラフォルグの場合、そのような創造行為を行いながら、これまで一度もそうした系譜の中で扱われることはなかった。理由は、簡単である。ラフォルグが分裂病に罹患したという事実がないからである。研究書においても軽い神経症程度の記述はあるにせよ、分裂病について述べられているものはない。前提となる分裂病の罹患という事実なくしては、その系譜に加えることはできないのは当然のことであろう。しかしながら先程の「非一意味の力」による圧力体験を含めて、「漠とした被注察感」⁽¹⁷⁾「世界没落」感⁽¹⁸⁾あるいは幻聴など、罹患した患者ではなくては体験しえない記述が、ラフォルグの作品に数多く散見できるのである。またラフォルグの生涯をたどる時、分裂病発症の多くの要因を見出すことも事実であり、それゆえ病理学からのアプローチが何故されないのか、私にとっても疑問であった⁽¹⁹⁾。

その理由としてラフォルグの場合、分裂病の発病はあったが、目に見える形での精神障害にまでは至らなかったことがあげられる。人はなにかの原因で発病し、病気の進行とともに目に見える形での精神障害に至り、分裂病との診断が下される。いわばこうした明白な事例をもって、人は患者とされ、文学者であれば文学史にそのレッテルを貼られ、同時に病理学の対象となる。しかしながらラフォルグの場合、発病があったにもかかわらず、臨床的精神障害という表立った事例がなかったために、そうしたレッテル貼りが行われなかった。それゆえ、分裂病に罹患した人でなければ書きえない内容を書きながらも、その病の認定が行われてこなかったといえる。しかしながら近年になって、創造性と精神障害の関係は見直され、分類において精神障害偏重の姿勢は、あらためられることになる。またこの問題は、病理学における分裂病と創造性の時間的関係の問題とも深くかかわっているので、あわせて語りたいと思う。

分裂病と創造性との時間的關係については、昔から病理学においてしばしば論議されてきた問題の一つであった⁽²⁰⁾。過去においては、何よりもおもてだった精神障害の有無が重視され、精神障害前創造・精神障害後創造・精神障害と創造の同時進行といった3つの形で、単純に分類されていた。つまり、①精神障害以前に主要な作品を創作、②精神障害後に主要な作品の創作、③精神障害と主要な作品の創作が同時進行して行われる場合の3つに分類されていた。病理学者ランゲーアイヒバウムは、この考えに立ち、多くの芸術家・詩人の分類を行っていた。たとえば、主要な作品を書いた後に臨床的精神障害に陥ったヘルダーリンは、グループ①に分類され、信じられないことに、精神病と創造との關係を否定されていた。この基準にしたがえば、精神障害を持たないラフォルクは、その分類にかけられる前に除外されることになっていたであろう。

しかしながらこうした分類は、過去のものとなっている。というのも、まず第一に精神障害前でも、病が創造行為と深くかかわっていることが明らかになってきたからである。さらにいえば精神障害に至る前こそ、逆に創造行為が高まり、主要な作品がつくられることが多いということがわかってきたからである。またそれとともに、精神障害以後は創造行為が逆に低下する傾向にあることが判明したからである。第二に精神障害という基準そのものが、用をなさなくなったことも大きな原因である。分裂病の症状のあらわれかたは千差万別であり、精神障害を持たない症例も数多くあるからである⁽²¹⁾。また、27歳というあまりに短いラフォルクの生涯もその原因かもしれない。つまり、精神障害がでる前に亡くなってしまったという可能性もあるからである。

以上の理由から、精神障害の前後という単純な区分けではなく、分裂病の各段階の症状、あるいはその症状に対する小説家・詩人の在り方（存在態勢あるいは存在様式）による区分も考えられることとなった。

- 《①分裂気質性存在態勢（共同世界との解離、真の存在との親和性）
—創作（精神病前創造行為）
②分裂病初期状態—創作（精神病後創造行為Ⅰ）
③顕在発症—創作（精神病後創造行為Ⅱ）》⁽²²⁾

これは、加藤敏氏がその著『創造性の精神分析』のなかで示している分類であ

る。氏はそれぞれの存在態勢について詳述し、それらに基づき、3つの異なる段階の創造行為をあげている。上でも述べたように精神障害前の創造行為が重視され、精神障害の前に、2つの段階の創造行為を設けている。つまり分裂病の潜在状態とされる分裂病質（クレッチマー）にまで範囲をひろげて、その病質が創造行為を生み出す段階（精神病前創造行為）をおき、つづいてそのあとに訪れる急性期のトレマ期・アポフェニー期⁽²³⁾における「精神病後創造行為Ⅰ」をおいている。それに、従来の精神障害後の精神病後創造行為Ⅱを加えて、3段階としている。

こうしたことにより、作家・詩人の評価も変わってくる。たとえばランゲーアイヒバウムによって、分裂病と無関係とされたヘルダーリンは、ここでは精神病前創造行為・精神病後創造行為Ⅰ・精神病後創造行為Ⅱといった3期にわたって創作を続けることができた特異な詩人とされることとなる。このような分類で見れば、表立った精神障害はなかったとはいえ、ラフォルクもその範疇に加えるべきではないだろうか。つまりこの区分に従えば、冒頭で述べた「沈黙」（未知なる力）による圧力とは、急性期の核となる基本病態であり、こうした体験を踏まえてのラフォルクの「沈黙」をめぐっての創作は、精神病後創造行為Ⅰということになるからである。また、ここでは述べることはできないが、精神病前創造行為の特徴的な「真の存在との親和性」を示すような内容も作品の中に散見でき、臨床的な発症が認められなかったにもかかわらず、ラフォルクが病理学の対象となる資格を、十分に持ちあわせていることがわかるのである。

第3章：「全てなるもの」

「全てなるもの」という不可解な存在・語が、いつラフォルクにおいてどのように生まれたかは定かではないが、生涯にわたって、かれの作品において繰り返し語られることになる。27年という短い生涯、そして10年にも満たない文筆活動期間に、初期とか後期などと区切るのはナンセンスであるが、「全てなるもの」は、初期の『地球のすすり泣き』時代の作品に頻繁に用いられ、中・後期に向かうにしたがって明らかに少なくなってくる。そしてそのままなくなるかというと、そうではなく、後期の作品『ハムレット』『サロメ』『パンとシュリンクス』そして有名な「全てなるものの立場に関する真相」が書かれている『ペルセウスとアンド

ロメダ』にも散見される。そして当然のことながら、ラフォルグの研究者も、この不可解な「全てなるもの」について言及している。たとえば、広田正敏氏はその著『ラフォルグの肖像』の中で、次のように述べている。

《《全能者である「全て」なるもの (Tout) は擬人化された宇宙の秩序であり、1880年の時期にすでに詩人の独特の用語として定着し、反抗の対象となっていることがわかる。》》⁽²⁴⁾

しかしながら、ラフォルグとその病理との関係を考えてこなかったがゆえに、鍵語であるにもかかわらず、この不可解な「全てなるもの」について、十分な考察はされてこなかった。この言葉こそ、分裂病という病理の理解があって、はじめて理解できると考える。

まず作品にあらわれる不可解な「全てなるもの」について、大まかにまとめてみることにする。ラフォルグにおいて、その「全てなるもの」は、まず「沈黙」と同様に宇宙的存在として考えられる。それも、万物を支配する全能者あるいはすべてを取り仕切る宇宙の掟として語られる⁽²⁵⁾。ラフォルグにとって、その存在は絶対で、それに身をゆだね生きることを余儀なくされる⁽²⁶⁾。そしてこのような強力な力を持つ存在である「全てなるもの」は、ある場合には、神・仏と並べられることもある⁽²⁷⁾。しかしながら、こうした神でもある「全てのもの」に服従する一方、その幽閉状態を疑問視したり、嫌悪し揶揄・悪口を行なうこともある⁽²⁸⁾。そして最後には、自分がその「全てなるもの」の座につき、全能者たる神となる⁽²⁹⁾。

まず、この「全てなるもの」という言葉の名称について述べることにする。分裂病の患者の中には、ある一つの言葉、あるいは幻聴として聞いた何かわからないものがとりつき、それに支配されてしまうことがしばしばある。その言葉の意味も由来も一切理解されていないにもかかわらず、それは妄想の世界の中心にすえられ、世界および患者を支配すると同時に支える核の役割を果たすことになる。もちろんこの名称は、患者によってさまざまであるが、それぞれの患者にとって同じような役割を果たしている。たとえば、羽根氏が指摘していた「ショーエン」もそれにあたる（《《正体は謎であるが、ほかに名づけようのないものであり、自分の世界の根源であり、全てのものに通じて、全てのものを形成するもの》》》⁽³⁰⁾）。ラフォルグの場合も、それが「全てなるもの」という名称になっただけで、同じ

役割を果たしている。

つづいて、この不可思議な「全てなるもの」の成立について述べることにする。その成立には、分裂病患者の急性期のアポフェニー期に見られる「万能体験」が起因している⁽³¹⁾。「万能体験」とは、コンラートが述べているものだが、一言でいえば「自らの行動あるいは自らを取り巻く世界が、全能の誰かあるいは何かに支配され、その掟にしたがって全てが展開していつている」という分裂病特有の妄想である。もちろん、その誰かあるいはその何かについてはなにも知ることなく、ただ受動的にその掟にしたがい自らが動かされているという体験である。

またこうした妄想の創出について知っておくことも、その体験を理解する上で、意味のないことではない。その創出の背景にあるのは、病によって壊れゆく自我が、自らの拠り所を作り上げる行為だということである。これは分裂病の急性期のアポフェニー期の特徴であるが、自分が置かれた不気味に変化した世界を前にして、それを統御する神のような万能の者あるいは何かを作り上げ、そのものによる世界の統制あるいは支配を考え、そこを自らの安寧の地としようとする行為であるということである。そしてその神のごときものに絶対的な力を与えることによって、自分自身も縛られるのだが、同時にその崩壊する世界の統御を任せることになるのである。そしてこうしたカオスを統御する絶対者は、しばしば神的存在として語られることになる。先ほど指摘したが、ラフォルクグにおいて、「全てなるもの」が「神」「仏」「梵天」といった神仏的存在と並べ置かれるのは、そのためである。

しかしながら妄想が作り上げる絶対者は、完全なものではけっしてない。したがってその絶対者との間に、違和がたえず生じ、つづいて軋轢・葛藤が生まれ、まずは疑問ついで反抗という形で、絶対者とぶつかり合うことになる。とはいえ、それらはすべて妄想の中の産物にすぎず、解決されることなく堂々巡りを続けることになる。分裂病の患者の多くは、その絶対者による幽閉状態を嫌悪し、揶揄・悪口など反抗を試みたりするのだが、最終的には反抗に疲れてあきらめ絶望に陥ることになる。初期詩篇に見られる絶対者である「全てなるもの」への揶揄・悪口は、こうした状況を如実に示したものといえるだろう。

最後に、神のごとき絶対的支配者を作り上げる「万能体験」は、自らをその座にすえるということも同時にあるということを指摘しなければならない。この不思議な神に取って代わろうという行動の背景には、まず急性期のアポカリプス

(黙示録)期の存在態勢がある。アポカリプス期とは、事物の日常のあり方が剥奪され、言葉では言い表しがたい裸形の「もの」が突出してくる「もの」体験が世界レベル宇宙レベルまで広がった結果生じる世界没落体験のことで、とりわけ患者の状態が鬱に傾いた場合生じるとされている。しかしながら、患者の状態が鬱状態にだけにとどまることはなく、逆の躁の状態へ傾くこともある。その場合には、こうした世界没落を前にして、自らが神になることになる。また患者によっては、アンビヴァランな状態に置かれ、両者の間を激しく行き来する場合もある。

《《アポフェニー期（あるいはアポカリプス期）に入ると躁か鬱かのいずれかに傾く傾向がある。もう一段進めば、鬱的な場合には過剰な虚無体験さらには世界没落体験に至り、躁的な場合には過剰な「神となった体験」あるいは「世界支配体験」となる。中立の場合には極限的興奮状態に至るが、一極から他極へと揺れ動き、一人の中に「世界没落体験」と「神となった体験」とが共存することになる。》》⁽³²⁾ と、コンラートも述べているように、中立状態に置かれた患者は、「世界没落体験」と「神となる体験」という両極の中で激しく揺れ動くこととなる⁽³³⁾。ラフォルグの場合も、この時期こうした中立状態の中で両極の間を揺れ動き、世界あるいは宇宙没落ともに、「神となる体験」つまり自らが「全てなるもの」になることを書きつけることとなる。

《《すべてのものが、大きな崩壊へと崩れ落ちていけばいいんだ！
最期のあえぎが過ぎるのを聞きたいものだ！
もはや時間も、こだまも、観客も見せ場もなく
取り返しのつかぬ「夜」になるといいのだ！》》⁽³⁴⁾

《《おお！さらに親密になって！わが存在は溶解する…
蒼穹、樹液、湧き水、そう、ぼくは液化し、
全宇宙の生命を経巡って循環するのだ、
ぼくは無限、ぼくは「神」、そして「全てなるもの」…》》⁽³⁵⁾

第4章：病の消滅あるいはベルトレ時代の終焉

1880年、《ぼくの書物——新しい時代の文学的、予言的作品》⁽³⁶⁾ と、20歳のラフォルグは広大な構想をぶち上げ、『地球のすすり泣き』の制作に取りかかり、多くの詩が生まれることとなる。作品制作は、それだけにとどまらず、自伝的要素の濃い中篇小説『ステファンヌ・ヴァシリュー』そして『落伍者』も同時に書かれていた。そしてある種の高揚感を味わいながら、過剰な読書欲そして創作欲、それがラフォルグの「ベルトレ時代」⁽⁴¹⁾ と呼ばれるものであった。

「沈黙」あるいは「美」（未知なる存在X）にとりつかれ、苦痛とも快楽ともいえないアンビヴァランな状態で、その宇宙的内的体験を、詩という「芸術」をもってあらわしていく。いわばこうした恍惚の中で、『地球のすすり泣き』の作品群は書き進められる。しかしこうした恍惚は長くは続かない。数年もたたないうちに「ベルトレ時代」は終焉をむかえ、『なげきうた』にみられるような「ジレットの時代」へと移行していくこととなる。そして『地球のすすり泣き』そして『落伍者』は相次いで中断そして放棄となる。

こうした移行の一原因として、1881年のベルトレ街からの転居に始まる外的要因があげられている。すなわち、それは「ガゼット・デ・ボ・ザール」誌の社長シャルル・エフリュシの秘書を辞め、ドイツのヴィルヘルム1世の妃アウグスタ皇后のフランス語読書係となってフランスを離れ、各都市を転転としたことが、ラフォルグに影響をあたえたというものである⁽³⁷⁾。しかしながら、こうした外的要因とともに、病という内定要因も見ていく必要がある。というのも、これまで見てきたように初期詩篇は、病理的創造の要素が極めて高い作品であるからである。つまりラフォルグの場合、初期分裂病者に見られる創作行為⁽³⁸⁾、すなわち病が原動力となり、作品が創りだされてきただけに、その病のありようによって創造行為が左右されるのは当然のことといえよう。

ベルトレ時代、ラフォルグは高揚感にひたり創作を続けながらも、みずからを創造へと駆り立てるもの、つまり自分自身に潜む狂気の存在に徐々に気づくようになる。たとえば初期詩篇と同じ時期に書かれていた『落伍者』では、狂気が一つのテーマとなっていたし、初期詩篇を見ていく時、「狂気」「狂い」といった語がしばしばあらわれるのに気づく。そして後になって「自伝的序章」と題してみずからの人生を語る詩の中で、ラフォルグは「狂気のぼく」と銘打ち、その時期

の自らの所業をこのように歌っている。

《《それに、いつもぼくらに不満顔のあの天を前にして
狂気のぼくはひとりの仏陀の名で末法を説くことを夢みた！》》⁽³⁹⁾

またそうした狂気の自覚とともに、狂気をもたらす恍惚感が自分から徐々に去っていくのをラフォルグは感じるようになる。病が原動力となり、恍惚感とともに、駆り立てられる形で創造するという病理的芸術行為は、多くの場合長くは続かない。それはラフォルグにおいても同様であった。自分を陶醉させた「沈黙」（「美」）が徐々に自ら沈黙しはじめ、「感激」「恍惚」をラフォルグにもたらさなくなってくる。ラフォルグは、『からっぽの貯水槽』をはじめとしていくつかの詩の中で、その嘆きをつづることとなる。

《《卑怯なぼくは、最後の偶像である「芸術」が去るのを見てしまった。
「美」ももはや不滅の感激でぼくを捉えなくなった。
ぼくは負けたと感じている。
というのもこの恍惚が「芸術」とともに飛び去ってしまい
かつての欲望も静まってしまうこともあるからである。》》⁽⁴⁰⁾

そしてラフォルグは書簡の中では、より明確な言葉・表現でその「感激」「恍惚」の消失を語ることになる。たとえば1882年3月の書簡では、《結局のところおそらくは「全てのもの」は幻想にほかならず、私たちを夢見るものが、みずからの麻薬の陶醉を早め終わらせてしまったということにすぎないのでしょう。》⁽⁴¹⁾と書きつけるとともに、《《今は何ごとにもジレッタントです。時には宇宙的なむかつきの小さな発作におそわれることもあります…》》⁽⁴²⁾（82年2月ミュツァー夫人宛）と、発作という言葉を使い、その小さな間歇的な訪れを語ることになる。そして醒め始めた者にとって、恍惚とか熱狂でもって書くこと・書かれたものは、嫌悪の対象となる。この章の冒頭で引用した広大な構想のぶち上げが夢であったかのように、あるいはその夢から醒めたかのように、《《ぼくの詩集が俗っぽいつまらぬ汚物の寄せ集めということに気づきました》》⁽⁴³⁾（82年2月）と書きつけることになる。はっきりとした断定はむずかしいが、82年の2月頃

には、先ほどの書簡に「今はなにごとにおいてもジレット」⁽⁴³⁾と書きつけていたように、ラフォルグの中で、いわゆる「ベルトレ」モードは終焉をむかえていたのだろう。そしてさらに完全に醒めたラフォルグは、4年後の1886年に、次のような最大の嫌悪を書き送ることとなる。

《《ぼくはここ（ドイツ）に滞在することを喜んでいる。というのも、このようにパリから遠くはなれたおかげで、後になって一生後悔させられたかもしれないおろかな作品を公表せずにすんだからだ。》⁽⁴⁴⁾

皮肉にも、この手紙の1年後にはラフォルグは亡くなり、たとえ公表したところで、さしたる後悔にはならなかった。そして『地球のすすり泣き』は公表はされず、その後発表された『なげきうた』におけるピエロをめぐる詩篇、そして『聖母なる月天のまねび』の月をテーマにした詩篇によって、ラフォルグは「月とピエロの詩人」ということになり、主旋律から「全てのもの」は消えていくことになる。とはいえ、作品としての『地球のすすり泣き』にたいしては嫌悪をいなくものの、ベルトレ時代の「全てのもの」との抗争さらには合一といった宇宙的体験は、ラフォルグ自身にとって貴重で捨てがたいものであった。事実、『なげきうた』の出版の際に、その冒頭のベルトレ時代の「自伝的序章」の削除問題がおきた時、次のような書簡を書き綴っている。これを読めばベルトレ時代の「全てのもの」との内的宇宙的体験が、ラフォルグにとってどれほど重要であったかを理解できるであろう。

《《さからって申し訳ないのですが、「序章」は残しておきたいと考えます。この詩は昔の詩句で書かれ、騒々しく、いやなものです。自伝的な詩なのですが…。ぼくはかつての龐大な哲学的な詩篇を犠牲にしました。出来が悪かったのは明らかだったからです。でも手短に言えば、それは踏まなければならない段階でしたし、（この詩集を送る人たちに）ディレットでピエロである前に、ぼくは宇宙の住人であったことを言うてやりたいのです。》⁽⁴⁵⁾

註

- (1) ジュール・ラフォルグは、フランス文学史でも扱われることの少ない詩人であり、それゆえ参考までに略歴を付すことにする。

ジュール・ラフォルグ (Jules LAFORGUE : 1860年-1887年) は、南米ウルグアイのモンテビデオの詩人。19歳 (1879年) の時、パリのベルトレ街5番地に転居。異常なまでの読書欲に捉われ、サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館に通いつめ、科学書・哲学書・宗教書、とくにハルトマンの『無意識の哲学』を耽読。またルコント・ド・リールやボードレールなどの詩に接する。と同時に、詩人のギュスターヴ・カーンや、ポール・ブールジェと知り合い、みずからも詩・散文の創作を行なうようになる (20歳頃)。「ガゼット・デ・ボ・ザール」誌の社長シャルル・エフリュシの秘書となり、中篇小説『ステファンヌ・ヴァシリュー』あるいは自伝的要素の強い小説の執筆、さらに「哲学的」詩篇を書き、『地球のすすり泣き』という題の詩集としてまとめようとする。こうした19歳から21歳にいたる知的形成・哲学的高揚・文学的創作期を、住んでいたベルトレ街にちなんで「ベルトレ時代」と呼ばれている。

その後、ドイツのヴィルヘルム一世の妃アウグスタ皇后のフランス語読書係となり、ベルリンをはじめ各都市を転々とする生活を送りながら、『なげきうた』『聖母なる月のまねび』『伝説寓話』などを制作。英語レッスン係のリア・リー嬢とロンドンで結婚 (26歳)。翌年急性肺炎にて短い生涯を終える。

- (2) 広田正敏著『ラフォルグの肖像』(JCA出版) p.153
- (3) Jules Laforgue : *Mélanges posthumes* (Slatkine France, 1970) p.116～117
- (4) 宮本忠雄著『精神分裂病の世界』(紀伊国屋書店) p.125
- (5) クラウス・コンラート著『分裂病のはじまり』(山口 直彦他訳 岩崎学術出版社) p.66, p.74
- (6) 加藤 敏「幻覚・妄想症状」『精神分裂病—基礎と臨床』(木村・松下・岸本編)、朝倉書店 p.387
- (7) 同上 p.385
- (8) 加藤 敏著『創造性の精神分析』(新曜社) p.121
- (9) 同上 p.122
- (10) Jules Laforgue : *Poésie Complètes* (Le livre de Poche, 1970) (以下 P.C.) p.338 同様に『草稿』にも次のような詩が書き綴られている。

《《そして天空の宇宙の奔流のように
厳かな威風 厳かなメニューエット 巨大な
それぞれの軌道に投げ出され
錯綜し、ほぐれる、物言わぬだが恐ろしい厳かな静寂、
「空間」の無限の沈黙の中、塊、空間》》

(11) P.C.p.329

(12) このように個人の体験が、地球レベルあるいは宇宙レベルで語られるのは、また単に比喻にすぎなかったものが、比喻という形ではなく、実際の話となるのは、分裂病患者によくみられることである。たとえば、急性期のアポカリプス（黙示録）期において、自らの日常の世界の崩壊現象が、全世界の崩壊（ラフォルグの場合は地球・宇宙の崩壊）へと結びつける妄想が多く語られることになる。ラフォルグの宇宙思考については、少年・青年が抱く宇宙への単なる願望（広田正敏著『ラフォルグの肖像』 p.215）という考えもあるが、病が宇宙的規模の妄想を提供することも考えるべきだと思う。

(13) P.C.p.349（1880年10月26日）

(14) 宮本忠雄著『言語と妄想』（平凡社選書） p.156

(15) P.C.p.475

(16) P.C.p.351

(17) P.C.p.375「ぼくの背後に、気のせいか、足音がたえずつきまとい、冷笑する気配」

(18) P.C.p.357～358「地球の壊滅をもたらす未曾有の嵐よ、やって来い！疾風怒濤の竜巻を放つがいい」

(19) 発病の一つの原因として、宮本忠雄は『精神分裂病の世界』で次のように述べている。《《ある種の環境や状況も発病の条件となる。近ごろ盛んな家族研究の教えるところでは、分裂病の家族には父親の欠損、両親の不和、母子関係のゆがみなどをはじめ何らかの意味で秩序や安定を欠いた家庭像が大部分であるというし、「分裂病をつくる母親」といううがった概念さえアメリカで作り出されている。またあとでも触れるが、言葉の通じない状況に投げ込まれた際に、分裂病と似た病像が反応性に現れることも事実で、まわりの現実から離されても心理的に孤立した状況が危機的反応として分裂症の病態を

とるものと思われる。》》（宮本忠雄著『精神分裂病の世界』紀伊国屋書店 p.49～50）

こうした環境や状況説をとる研究者にとっては、ラフォルグは格好の例となる。ラフォルグは、南アメリカのウルグアイのモンテビデオで生まれ、6才の時、父の生まれ故郷であるタルブ（フランスの西南部）に一家でもどる。（フランス語を急に使うことになるなど、この急激な環境の変化は、ラフォルグに大きな影響を及ぼし、心の均衡を失わせたと、ラフォルグの研究家リュッシュンは指摘している。）さらにその翌年、ラフォルグが7歳の時、父親はウルグアイに帰国。またその数週間後、母親はラフォルグと兄のエミールを親戚にあずけ同様に帰国。（ラフォルグの詩の中に、「みなしご」なる語が多く散見できるのは、こうした体験が根源にあると考えられる。）

そして9歳の時、リセの寄宿生となる。ラフォルグが15歳の時、一家は、再びタルブに戻ってくるが、その時子供の数10人、母親は11人目の子供を身ごもっていた。16歳の時、一家はパリに移住。1歳の時、母親は12番目の子供を流産の後に肺炎で死亡（38歳）。経済的事情から、19歳の時、一家はベルトレ街に転居。さらに父親は病気のため、タルブに戻り、妹のマリーとラフォルグだけがパリに残される。21歳の時、重病の父親の看病のため、マリーもタルブに戻り、ラフォルグはひとりパリで窮乏生活を送る。そしてその年、父親はタルブで死亡。ドイツ行きの準備のため、葬儀にも出席できないまま、コブレンツに出発する。

(20) 宮本忠雄著『言語と妄想』（平凡社選書）p.159

(21) 中安信夫『精神分裂病の経過と症状』（『こころの科学』日本評論社1995年3月号）p.8～13

また、《《トレマとアポフェニーの段階で、急性病態がそれぞれ短期間、挿間的に出現し、他者と区別されるひとつのまとまりとしての自我の自律性と自由性が侵害されるが、それ以外は、たとえまがりなりにではあるにせよ、普通の生活ができているという風に、波状性の経過をとり、長期にわたり明らかな事例化をきたさない症例もあることを付け加えておかなければならない。》》（加藤 敏著『創造性の精神分析』（新曜社）p.119

(22) 加藤 敏著『創造性の精神分析』（新曜社）p.119

(23) 「トレマ期・アポフェニー期・アポカリプス期」は、クラウス・コンラート

の用語。詳細についてはコンラート著『分裂病のはじまり』（山口 直彦他訳 岩崎学術出版社）を参照のこと。ここでは概要だけにとどめる。

分裂病は、初期・急性期・慢性期にまず分類される。

初期とは分裂病特有の性格を保持している者が発病し、自生・過敏状態にあること。主なものをあげるならば、次のようなものである。

①自生体験：自己の意思によらず、体験そのものが勝手に生じてくると感じられる状態。

②漠とした被注察感：どこことなく周りから見られているという感覚。

③緊迫困惑気分：何かが差し迫っているようで緊張するのだが、なぜそんな気持ちになるのかわからなくて戸惑う状態。

急性期とは、上記の初期状態の後に訪れる妄想状態。その状態を内容によってコンラートは、3段階に分けている。

①トレマ期：妄想気分など（周囲の世界がこれまでとは違ったように感じられ、何かが起こりそうで不気味に感じられたり、何か意味しているように思える。）

②アポフェニー期：妄想知覚など（それまで漠然と自分と関係があるとしか思えなかった周囲の出来事に、特別な意味があることを明瞭に感じ取るようになる。事物の意味を無媒介的に拒むことなく受け入れる。「異常意味意識（ヤスパース）」「動機なき関係付け」（グルーレ）例として、カラスの鳴き声を聞き、自分は殺されると思い込んでしまう。）また、外界からの知覚刺激なしに、突然心の中で思いつく妄想着想もある。

③アポカリプス（黙示録）期：事物の日常のあり方が剥奪され、言葉では言い表しがたい裸形の「もの」が突出してくる「もの」体験、自分の言葉が全て失われてしまうという言語危機体験、あるいはこの体験が世界レベル宇宙レベルまで広がった結果生じる世界没落体験があるので、そう呼ばれる。こうした体験の折には、宗教的昂揚感や啓示を伴うことが多いといわれる。

(24) 広田正敏著『ラフォルゲの肖像』（JCA出版）p.96

(25) P.C.p.328 「宇宙の掟は、物静かに展開していくのだ」

(26) P.C.p.418 「支配力を持つもの・掟」

(27) P.C.p.419 「梵天しか存在せず、彼が全てのものであり、全てのものは彼なの

だ。」

- (28) P.C.p.456 「全てなるものの規則を守ることは得なのか？」
- (29) P.C.p.409 「ぼくは無限、ぼくは「神」、そして「全て」なるもの…」
- (30) 羽根他著「破瓜型（非妄想型）分裂病の諸段階——言語的「差異と関係づけ」からする精神病理学一考察——」（精神神経学雑誌第93巻第10号1991年）p.943
- (31) 「万能体験」については、コンラートが次のように述べている。《《患者は自分が不気味に変化した世界のただなかにいるという体験をしている。そこでは、あらゆるものが舞台の書き割りのように作られ、彼を試し欺くためにわざわざ備えられている。（…）しかも彼自身はこれらすべてに対してまったくの受け身であるべしという審判が下されている。この芝居に責任を持っている全能に近いプロデューサー、神のごとき演出家がいるということが、わざわざ考えずとも無条件に前提とされて疑われることはない。この強大な共演者はしばしば匿名の「誰か」の背後に隠れている。つまり、誰かがそのようにしつらえ、誰かが私を監視し、誰かが私から何かをえようとし…誰かがそう考えている。またそんなことができるのはいったい誰なのかと問い詰めても、肩をすくめるだけで、答えは返ってこない。》》 クラウス・コンラート著『分裂病のはじまり』（山口 直彦他訳 岩崎学術出版社 p.150）また、こうした誰かあるいは何かに名前をつけて、自分の全ての行動が、その誰かあるいは何かの「掟」に支配されることを訴える患者もいる。F・カフカの小説に読まれる不条理の世界の源泉を思わせる。
- (32) クラウス・コンラート著『分裂病のはじまり』（山口 直彦他訳 岩崎学術出版社） p.224
- (33) おなじく分裂病に罹患していた詩人アルトナン・アルトーの場合は、その「神となった体験」「世界支配体験」は、「救済者妄想」として現れることになる。森島章仁著『アントナン・アルトーと精神分裂病—存在のブラックホールに向かって』（関西学院大学出版会） p.89
- (34) P.C.p.425
- (35) 『ラフォルク全集 I』（広田正敏訳 創土社） p.384
- (36) 『遺稿集』の中で、ラフォルクは次のように書きつけている。《《哲学的とぼくが読んでいる詩集。（…）ぼくは純真な気持ちでこの書物をつくる——5部

からなる——ラマサバクタニ、苦悩、死に関する詩、憂鬱の詩、諦念。(…)
この書物は『地球のすすり泣き』という題名である。第1巻、それらは思索
の、頭脳の、地上に生きる意識のすすり泣きである。第2巻、天空の無邪気
さの中に漂うこの惑星の、あらゆる悲惨、あらゆる汚辱を集めるつもりであ
る。歴史の乱痴気騒ぎ (…)
狂気》。Mélanges posthumes (Slatkine France、
1970) p.7～8

- (37) 「この文化的な雰囲気の変化は、人がオムレツをひっくり返すように、私の
脳をひっくり返しました。」(Jules LAFORGUE : ŒUVRES COMPLETES
Ⅲ Slatkine Reprints GENEVE 1979 以下「ŒC」) p.141(1982年4月9日エ
フリュシ宛書簡)
- (38) 宮本忠雄著『言語と妄想』(平凡社選書) p.157
- (39) P.C.p.33
- (40) P.C.p.464
- (41) ŒC Ⅲ—Ⅳ p.128 (1882年3月ミュツアー夫人宛書簡)
- (42) ŒC Ⅲ—Ⅳ p.122 (1882年2月ミュツアー夫人宛書簡)
- (43) ŒC Ⅲ—Ⅳ p.112 (1882年2月エフリュシ宛書簡)
- (44) ŒC V-VI p.146～147 (1886年7月E・ラフォルグ宛書簡)
- (45) Jules LAFORGUE : Lettres à un Ami 1880-1886 Paris MERCVRE DE
FRANCE p.79 (1885年3月カーン宛)

最後に

この論文は、以前中央大学の文学部で担当した「特殊講義」をもとにして、そ
の後の研究内容をくわえてまとめたものである。文学史でもあまり扱われない
J・ラフォルグ、そして病理学が入り混じった授業は、文字通り「特殊な」講義で
あった。とまどう学生も多かった。ただ、興味を示してくれる学生もいて、その
場の雰囲気で「いつか文章にしてみる」などと約束してしまった。個々の詩をと
りあげ病理学的に解説する授業の内容を、論文というまとまった形にするのには、
ずいぶん時間がかかってしまった。